

---

# Operation “ Hero ”

獅楼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Operation “Hero”

### 【Nコード】

N1643T

### 【作者名】

獅楼

### 【あらすじ】

巨大な光のうねりに飲み込まれ、気が付けば森の中でたった一人。一緒に召喚された人も居ない、神様からのお告げも無い、異世界の事も全く分からない、それじゃあとりあえず慎重に大胆に散策を開始するのでしょうか。（残酷表現あり/主人公チート成分が含まれています。）

## オープニング（前書き）

読むだけでは飽き足らず、とうとう妄想の赴くままに執筆を開始。  
投稿は割と不定期です、少しでもお暇潰しになれば幸いです。

## オープニング

まどろみの中に落ちてゆく。ゆっくりと何かに飲み込まれてゆくように体が沈む。

ああこれはいつもの夢だ。歯痒くもどかしい、いつもの・・・

・・・な・・・で・・・

行か・・・いで・・・

声が聞こえる。誰かが泣いている。伸びてくる手は宙を掴み力無く虚空を彷徨う。

何時もと同じ夢、同じ声、伸ばされる手。何がそんなに悲しいのとその手を掴もうとする。

だが今までも今回も何度手を伸ばしても宙を掻く手に振れる事は叶わなかった。

耳に響く泣き声は止まらず、ただ胸の奥に小さな棘を残す。沈んでゆく、どこまでも沈んでゆく。

「めええええんっ！」

スパンツ！という小気味よい音が辺りに響く。『そこまで！』という声が耳に届くと一息つき、目の前の相手に一礼して離れた。足を揃えて座りこんだ床はひんやりとして火照った体には心地よく、顔を覆う面を外し横に置くともう一息ついて正面を見据える。

「有難う御座いましたッ！」

ここに集まった自分たちは指導員に一礼して声を張り上げる。その後は軽く汗を拭いて着替えればもう帰るだけだ。

外ではまるで夏の終わりを告げるような細かい蝉の声が時折聞こえてくる。

騒音のようであったそれは徐々に減り、今ではもう殆どが形なりを潜めてしまっていた。

夏の終わりの夕暮れ時、私　　遊佐　織恵（ゆさ　おりえ）にとって一生忘れられない、忘れ難い出来事に身を投じる事となる。

## プログラム1・とりあえず肘鉄。

「先輩お疲れ様ですっ！」

「はいお疲れ様。」

足早に帰路に就く後輩たちの挨拶に答えながら私も帰り支度を整え、荷物を持つとゆったりと校門へ向かう。

風を切る自転車が横を通り過ぎるのを眺めながら私はゆっくりと校門を出た

まだ蒸し暑いと言える空気を少しばかり冷えた風がそれを風ぐ。学校から家まではほんの20分ほどで級友などに比べれば随分近い。ただ真っ直ぐ家に足を向けるのは味気ないので高校入学から続く日課であるお散歩コースを歩く。

木々が揺れる木陰のベンチに腰を落としてひと休憩。徐々に夜の帳が下りてくる空を見上げて今朝の夢を思い出す。

もう何度も同じ夢を見ている、毎日毎週というわけではなく多い時は確かに毎週見る事もあるけれど少ない時は数ヶ月間隔が開く事もあった。

今回も数週間ぶりに見たのだが、やはり変わらず同じ夢。何度手を伸ばしても触れられない手と泣き声。

不快なものではないのだけれど・・・ボウっと思考を巡らせていると光が見える。

ちかちかと不安定に揺らぐその光はどうも自転車のライトのようだ。

乗って漕いでいるわけではなく押しているせいで点いたり消えたりしていたのか。

「あれ、先輩お疲れ様です。」

「あ、キミ帰りこつちだっけ？うん、お疲れ様。」

自転車を押しながら歩いてきたのは同じ部活の後輩・・・私は女子剣道部、目の前の後輩は男子剣道部ではあるけれど。

それにしても今までこの場所で会った事は無かったはずだけれど、私と同じで家に帰る前の散歩だろうか。

「そっか、キミも気分転換しに来たんだね。」

「はい！まさか先輩に会うとは思わなかったのでびっくりしました。」

「私はねー何時もここを通って帰るんだー。」

人気は少なくて静かだし、ゆっくり休憩するには丁度いい自然に囲まれた小さな森林公園。兄弟姉妹達には危ないから止めなさいと何度も言われているのだけれど・・・何が危ないのだろう。

後輩くんは途中まで運びますよと防具を自転車の籠に乗せてくれた。

何時もより少しばかり身軽なお散歩は暫く続き、もう少しで公園を抜けるというところで彼の足が止まった。

「あれ？どうしたの？」

「先輩・・・っ」

「えっ・・・？」

ガシャン！と金属音が耳に届く。カラカラと回る車輪の音が妙に耳についた。

何があつたのか理解するのに少しばかり間が空いた。それはきっと反射的なものだと思う。

だからいま目の前で後輩が地面に突っ伏しているのは仕方ない。多分。

「え、ええと・・・ごめん？」

切羽詰つたような後輩の声に振り向くと、何故か大きく手を広げて飛びつこうとしていた。それに反応して思わず肘を突き出してしまったのだが顎にまともに入ったような気がする。大丈夫だろうか。

「・・・だっ」

「うん？」

「何で拒むんですか！？先輩だつて気を許して誘ってくれたじゃないですか！俺の何がいけないんですか。この次期剣道部主将と云われていて成績も優秀で金持ちの子供のこの俺をつ！何で拒むんですか！？先輩だつてちよつとくらいは期待してたはずでしょう？違う何て言わせませんよ。こんな所で偶然出会つたんですこれは運命なんです、運命だから受け入れてくださいよ。受け入れるよ！」

・・・うわぁ、どうしよう何を言つたのか半分以上理解出来なかつただけど。



とりあえず落ち着いて現状を把握しよう、うんそうしよう。

「ええとキミ、とりあえず名前は？」

「そんな事も知らないんですか！？いいですかちゃんと覚えてくださいよ！俺は2年C組の窪塚 勇一郎（くぼつか ゆういちろう）、クボツカグループ社長の一人息子だ！」

クボツカグループって何だっただろう・・・うん知らない。

窪塚くんかーとりあえず覚えてたけど、間違いなく彼と話すのは初めてだったと思う。

同じ剣道部ということで部活場所は男女一緒なので顔は知っていた。ただそれだけ。

「とりあえず、ごめんなさい。」

「へ？」

「好きでも嫌いでもない人に大人しく抱き付かれる趣味は無いので。」

そう言えば彼は顔を真っ赤にさせてまた半分以上理解できない言葉の羅列を紡いでいる。正直本当に興味が無いのでどうしよう。

穏便に済ませられるといいのだけれどと思いながら、気が付くともう一度窪塚くんを地面に張っ倒していた。痛いよねーごめんねーでも抱き付こうとするキミが悪いんだよー。

「畜生なんで・・・ん？」

「ん？」

あれ、声が聞こえる。この場所はあまり地元の方も夜は入ってこないはずなんだけど・・・現に私は高校入学当時から今までほんの数人とししか出会って無い。

でもそれは空耳ではないらしく彼もその声のする方をしっかりと見ている。もしかして彼のお目付け役とかそういう方たちだろうか。お金持ちだって言ってたし。

ミツケタ

そっかー帰りが遅くて心配してたんだねー。でもこんな場面見られても困るなあ、何だか私が窪塚くんをイジメてるみたいな構図になってるし。

ミツケタ。ミツケタ。

遠くから光がやってくる。懐中電灯持って慌てて探しに来たみたいで、その明かりは凄く早さで・・・あれ何か早すぎませんか？光が大きすぎませんか？

まるで車かバイクのようなスピードで迫り来る巨大な光のうねりは、呆然と立ちすくむ私とまだ地面に蹲っている彼を飲み込んだ……

## プログラマー・とりあえず肘鉄。（後書き）

ここまででいまだにヒロインの容姿に一切触れていないってどういうことなの。こっぴどいことです。

## プログラム2・とりあえずご飯。

行か・・・いで・・・

あれ？いつもの夢？

気を失ったりしたのかもしれない。もしかしたら暴走バイクが森林公園を突っ切っていてそれに巻き込まれたとか・・・

不思議に思うことは沢山あるけれど、この夢を見るとつい癖で手を伸ばしてしまう。

きつとも同じようにまた触れられないのだろうけれど、そう思っていた。

なのに、今回は違った。

指先から広がる血の気の失せた冷たい手の感触。私の手を確認するように優しく撫でて、その手は遠慮がちに握ってくる。

初めての邂逅に言い様の無い感情が込み上げてくる。

今なら私の声も届くだろうかと口を開いた。

『もう泣かなくていいよ、傍にいるよ。』

ずっと言いたかった一言、今まで一度も通じた事は無いけれど今回はなんとなく、そうなんとなく伝わるのではないかと、本当に直感のようなものだけだ。

ふと、声の主がふわりと微笑んだような気がした・・・

泣き声は、もう聞こえない・・・

そしてここでもう一度私の意識はブラックアウトした。

「……ん……うん？」

次に目を開いた時、傍に居た窪塚くんは居らずただ一人。その手に竹刀袋と学校鞆を持っただけの私は鬱葱とした大自然の中に佇んで居た。

あれ？森の規模が大きくありませんか？ここ、どこ………？  
見上げてみても何処を見ても木 木 木ばかり。僅かな枝木の隙間から差し込む光で何とか周囲を見渡せはするけれど、本当にここは何処なのだろう。

そもそも気を失って居る間に何があったのか、気を失っていたはずなのに何故私は棒立ちのまま目覚めたのか、うん全く分からない。

そもそもなんで私の髪の毛はこんなに伸びているんですか。  
呪いの市松人形じゃあるまいし、気が付いたらベリーショートから急に肩を越えるほど伸びるなんてどんな超常現象ですか。

普段は面を被るため、髪を纏めるのが面倒なので常に髪は短めにしていた。

こんなに長い髪は何年ぶりだろう……感傷に浸っている場合ではないのだけれどちょっとくらいは現実逃避をしてもいいと思う。させてください。

「うん、よし風雨を凌げる場所を探そう。」

近くで水の音がするので小川があったり滝もあるのだと思う。  
何であるのかはもうこの際、気にしないことにした。気にするものか。

木々が光を遮らない小川のはとり。そこでは水面がキラキラと光を反射して輝き、時折川魚らしきものが、その綺麗な鱗を光らせながら飛び跳ねる。

とりあえず先ほどまで夜だったのに今が昼間だということも気にしない事にした。

さて水があるわけだが飲める水だろうか？生水は下手をすればお腹を壊す可能性もあるし、最悪未知の病原体に感染する事も考えられる・・・が、何故かこれは大丈夫そうだと勘が告げる。多分大丈夫、たぶん。

水分補給も終わり、僅かな空腹を感じる。

ここの川魚は美味しいのかなあ？いざ実食！

近くに落ちていた小枝を拝借し、靴とソックスを脱ぎ捨てて浅瀬に入る。

冷たくて気持ちいい水の感覚を一通り堪能すると、片手に小枝を持って体から余計な力を抜く。

距離を取っていた魚たちが私を単なる岩などと同じ障害物と認識したのか、なんとか手の届く場所まで戻ってきた。

ゆらゆらと煌く魚影を見定め、無駄な動きを出来るだけ排除して私は小枝を振るった。

「そこっ！」

しなる小枝の先端に、確かな感触。振り抜いた切っ先にはまだ元気に水滴を散らす魚の姿がある。

うん、まさかこんな所で二年前の強化合宿の際に遭難した経験が役に立つとは思わなかった。一緒に遭難した当時三年生の先輩、有難うございます。おかげさまで美味しそうなご飯にありつけました。

更にその後、もう一匹を仕留めてからナイフ代わりになりそうな尖った石で魚の処理をする。味付けは出来ないけれどそこは我慢我慢。

大きめの石を組んで小枝を集めて魚を焼く準備も整った。あとは火・・・だけどどうしよう？ここは意地と根性で古代の方の英知を拝借して頑張るしかない。

美味しいご飯にありつくために！

苦戦する事1時間。木と木の摩擦で起こった火種をノートの切れ端に移すことに成功する。そこからはノートを破いたものを小枝の上に乗せて、火種を移す。

「や、やつと点いた・・・」

出来上がった焚き火の周りに小枝に串刺した魚をセッティングして準備完了。後は火を消さないように小枝を追加しながら暫し待つ。うーん、我ながら大した順応性。それでもあのサバイバル経験が無ければ今頃途方に暮れてお腹を空かせていた事だろう。

もう一度偉大なる先輩にお礼をしながら、焼きあがった川魚を美味しくいただいた。

さてお腹も膨れたことだしもう一度現状を思い出そう。

まず私はつい数時間前まで地元の小さな森林公園にいた。なのに、今は広大な森に居る。

まさか窪塚くんのお目付け役さんに気絶させられて、口封じの為に山奥に捨てられたなんて事は・・・うん、無い。それは無い。それでは私が棒立ちで目覚めた事、突然髪が伸びた事の説明がつかない。

気を失っていた間の時間経過で昼間になっているというのはありえない事ではないので思考から除外して、問題はその二点。

「日本じゃなかったりしてー」

まさかねー、と空笑いしながらも二匹目も美味しく頂戴した。とっても美味しかったです、マル。

食べ終えた魚の骨は埋めても野犬などがいる場合、掘り起こされて意味が無いので川に還すことにした。

「命をありがとう、ごちそうさまでした。」

手を合わせ、暫し黙祷。後はまたソックスと靴を履いて、焚き火に土を被せてからその場を後にする。

水場の確認はできた、あとは風雨を凌げる小屋か洞窟があるか散策する。サバイバルで大事なものは水の確保と安全の確保、これが先輩の最大の教えである。

何だかんだ言って、私は徐々にこの状況を楽しもうとしていた。



## プログラム2・とりあえずご飯。(後書き)

現在のスキル：サバイバル能力  
やっと容姿の一端が出ました。髪長さだけ。

### プログラム3・とりあえず戦闘。

自然の中を散策するというのはとても気持ちの良い事だと常々思う。

それでも限度というものがあり、昼間でも薄暗い鬱蒼として方向感覚を惑わされかねない大森林の中では楽しもうにもなかなかそうもいかない。

一度方向を失えばそのまま迷子になり死ぬまで森の中でさ迷い続ける可能性だつてある。

手には魚をさばく時に拾った鋭利な石。それで通過点の木に目印を付ける。

もう一方の手には頑丈そうな枝を握ってガリガリと地面に線をつける。まあこれは消えて無くなる可能性が高いので形だけのものだが。

行けども行けどもどこまでも続く森。小屋などがあればいいなと思ったけれど、もしかしてここは人が滅多に踏み込まない場所なのだろうか。

気を紛らわせるのに鼻歌など歌ってみた、うん空しい。

もしこのまま夜にでもなれば方角も分からない暗闇の中に取り残される事になる。そうなる前にどうにかして寢床を確保しておきたいものだが、そう簡単に・・・

簡単に・・・いった。

まだやっと視界に入ってきたという程度のもので距離はあるけれ

ど、前方に小屋らしきものを発見する。誰か住んでいるかもしれないがその時は泊めて貰えるよう交渉しよう。

足早に小屋に近付くと煙突から煙が上がり、そこで誰かが生活しているらしい事が伺えた。

小屋が目の前まで迫り、一歩ひらけた場所に踏み込もうとした足を・・・私は一度退いた。

「止まりな嬢ちゃん、ここがどこだか知ってて来やがったのか？」

もうすでに止まっていますかと言えば、そんな事はどうでもいいんだよと乱暴に返される。理不尽だ横暴だ！。

そういえば言葉が通じるといことは、ここは日本なんだ、良かった。

私、日本語以外は話せないから良かった。これでここがどこなのかとか、帰り道も尋ねられる。

「何も知らないのですが、ここはどこなのでしょう？」

「はあ？お嬢ちゃん頭でも打ったのか？」

よく聞け、という前置きをされて男が教えてくれたが、ここは盗賊団のアジトなんだそうだ。盗賊団？

改めて話を聞いた相手を見れば確かに、物語の中に出てくる盗賊のような格好をしている。何と云うか荒くれ者？そんなイメージ。

「すいません映画の撮影中だったんですね、お邪魔しました。」

脳内でそう結論を出した私はその盗賊役さんに頭を下げた元来た

道を引き返そうとするがそうもいかないようだ。

「おっと、この場所を見つけられたからには・・・」

「いくら女子供でも見逃せねえなあ。」

木の影に隠れていたらしい数人が私の進行を妨げるように立ち塞がると、先程話をした男が呼んで来たのか小屋の中からも更に数人現実逃避がしたかったのだけど、やっぱりそう簡単にはいかないものだなあとため息をついていると怒られた。理不尽！

「この状況分かってんのか？嬢ちゃん。」

「大の大人が寄ってたかって女の子を取り囲んで優越感に浸ってるっぽいのは分かりました」

で、本当の事を言ってみたらまた怒られると。しかも武器なんか取り出してじりじりこちらとの距離を縮めようとしている。

相手は5人。小屋の中にあと何人いるかは分からないけれど、せめて荷物を置かないとともに動けそうに無い。

目下の目的は小屋と反対方向に立ち塞がっている二人を抜く事。

地面を蹴って、男二人が行動するよりも先に仕掛ける。

慌てて反応する男が武器を振りかざしてくるが、本当に振り下ろしてくるだけだったので地面を擦り、横に避けてから時間稼ぎの為にガラ空きになった男の横っ腹に掌底を当てて体勢を崩す。

男がよろめいた隙に、もう一人が寄ってこないうちに距離を取る。手早く鞆を後ろに置き、竹刀袋から木刀を取り出す。今の私にはこ

れが唯一の武器なわけで。

警戒していた男たちは私の獲物が木の模擬刀ということにあからさまに安堵して気を抜いた事が分かる

知ってる？木刀だって、鈍器にもなるんだよ？

そういえば一度に複数相手というのは今まで経験した事はなかったなあと思いつながらも、落ち着いている自分に苦笑してしまう。

「なに笑ってやがる小娘えええええっ！」

それがまた癪に障ったのか男の一人が単独で向かってきてくれる。これは有難い、一人ずつ来てくれるなら対処はし易い。

模造刀なのか真剣なのかは分からないけれど状況を考えると真剣だと思った方がいいだろう。それも考慮して、真正面から受ける事は避ける。

そもそも筋肉が隆々と浮き上がった男性相手に、真っ向から力勝負して勝てると思うほど私は自惚れてはいない。

恐らく私が彼らに勝るものを持っているとすれば、それは速さだけ。

怒りに任せ振り下ろす武器を後方に下がり避け、男が再度武器を構える前に懷に踏み込み、下段の構えから男の顎を打ち抜いた。

小さな悲鳴を上げて男は倒れ、白目になっている。いい手ごたえを感じながら、次の自称盗賊さんを待ち構える。

あと、4人。

「ふー食後のいい運動したあー。」

木刀を袋に戻し、背伸び。この小屋にいた盗賊さんは5人だけだったようで、小屋の中にあつた紐でしつかり木に縛り付けておいた。警察さんとか呼べたらいいのだけど携帯は圏外だし、そもそも本当に日本なのか彼らの存在を見てまた不確かになった。

「う、ぐ・・・」

呻く声に目をやると、最初に気を失った盗賊さんが目を覚ましていた。丁度いい、状況確認させてもらうとしましょうか。

「おはよー、突然質問だけどここ何て森で何て国？」

「てめえっ！こんな事してタダで済むと・・・ぐふおっ!？」

「はいはいキリキリ答えるー」

あんまり煩くされて他の盗賊さんまで目を覚ましたら色々面倒臭いじゃない、もう一回気絶させなきゃいけない的な意味で。

その盗賊さんが言うにはここは名も無い森で、ユルグクという村の北に位置するらしい。国の名前はクロファイド共和国、らしい。

はい日本じゃないこと発覚した！しかも世界自体違うような気がする。聞いた事も無いような国だし、私の言葉が通じるのも不思議な話だし。

「くそ、久々の上物が・・・売り払えば大金ができたつてのに・・・

・  
「

もし何かの拍子でわけの分らない場所に来てしまったのだとしたら今のままでは少々危ないかもしれない。人身売買とか怖いし、性別なんかも隠した方が良さそうだ。

「黒い髪が珍しいの？それともこの目の色が？」

私はそこまで容姿がいいわけではないのは自覚していて、こういう場合高値になるような絶世の美女なんて事は絶対に無い。

なら高値になる要素が別にあるとしたなら、目の前の男たちが持ち合わせていない髪の色くらいしか思いつかない。

「どっちもだ。黒い髪に緑の目なんて見た事も聞いたことも無い。

」

そう、どっちもなんだねー。私の髪は本当に真っ黒で、光を浴びても茶色がかって見えないほどに真っ黒だ。

そして目の色、日本生まれ日本育ちのはずの私だけれど目の色だけは青みがかった緑色というおかしな遺伝子をしている。

優性遺伝とか劣勢遺伝とかどうなってるのと年を重ねるたびに不思議に思ったけれど、そういうこともあるのかと気にする事を止めていた。

これは髪はともかく目の色は隠さないとなあ。

「あーそうだ、村ってどう行けばいいの？」

村の北にあるということは、南に向かえばいいのだろうけど・・・  
南ってどっち？

「・・・崖沿いにここから右に・・・」

「・・・ほんと？」

「ヒッ！すいません左ですっ！」

目を泳がせている盗賊に、転がしてあった彼らの武器を突き付けると途端顔を青くさせて訂正してきた。

「そっかー色々ありがとうね！」

とりあえず笑って返すと、直ぐに手刀を入れてオトす。さてじゃあ村に行く前に色々と準備をしましょうか。

まずは服装をどうにかするべきか、と思って小屋を物色している  
と盗賊さんたちの戦利品らしきものが出るわ出るわ。

流石に金品を拝借するのは気が引けたので、着れそうな服をコー  
ディネートして手早く男装してしまう。

簡素な長袖の上衣にダボつとしたズボンにブーツを履いて、胸を  
潰して誤魔化すために胸当て、手袋と小手も拝借する。マントとい  
うかストールっぽいものを首に巻いて完成。

髪も束ねて一つにして、帽子を被り隠す。あとは目元を隠すもの  
を・・・と、そこまで考えてそういえば盗賊さんの一人がゴーグル  
をしていたなあと思い出し外へ。



目当てのゴーグルを拝借拝借。有難い事にグラス部分が色付きだったので目の色もこれで隠せそうだ。

学生鞆と竹刀袋が相当ミスマッチする格好になったが仕方ない。荷物を持ち、崖沿いを歩く。次の目的はユルグクの村、そこに辿り付いて休める場所を探して先立つものを手に入れる方法を考える。

どうやったら帰れるのかなんて予想もつかないが、まずは目の前にあるできる事からコツコツ済ませて適度に楽しんでゆくとうしよう。

プログラム3・とりあえず戦闘。（後書き）

やっとヒロインの容姿が揃ったところで男装。  
次は村の中でひと騒動。

## プログラム4・とりあえず尋問。

自称盗賊さんたちを昏倒させて、縛り付けて、今は村に向かって  
いる。

程よく辺りは薄暗くなってきているが、木々が光を遮っているせいで森の外よりも早く暗くなっているだけだろう。

さて村に着いたら何て言って泊めてもらおう…通貨も違うだろうし、もし宿みたいない場所があったとしてもタダでは無理だし。

働いて返すとか…最悪風雨が凌げる場所にさえ入れてもらえれば十分だし、晩御飯は食べたいけれどこの際一食くらい我慢するしかない。

あとは、あの盗賊さんたちもどうにかしてもらわないと夜の森にずっと放置しておくのは流石に心配だ。この森に獰猛な動物が居なければいいのだが。

道を聞いた盗賊さんの言う通りに崖沿いを歩くこと20分、遠くに光が見えた。

あそこまでたどり着けばもう森の外に出られるのだと思うと私の足は、知らず早くなっていった。自然の中を歩くのは嫌いではないけれど、こう何時間も薄暗い森の中だと少々気が滅入ってしまう。

どんな村なのだろう。物語に出てくるような中世的な感じの、のどかな村なのかな。まだ見ぬ未知の情景に心を躍らせながら、私は森の外へ一歩踏み出した。

で、私はいまれっきとした屋付きの屋内に腰を下ろしている。このままここでゆっくりできればいいのだけれど、現在そうもいかないう事情にて軟禁されています。

ええもう見事に不審者に認定されました！

森を抜けて直ぐに広がる牧歌的な村に感動しながら村を眺めていると、職務質問よろしく村の門を守っている人に質問責めにあつた。そのあまりのまくし立てに色々と何か言おうとしていた事が全て吹き飛んで頭の中が真っ白になり、不審者として捕まって今に至るというわけで。

勿論、抵抗すれば組み伏せられる自信はあつたけれどただの一般人の方にそんな無体は働きたくないし、盗賊さんの話をしたら警備隊の方を引き連れて確認に行ってくれるみたいだし！早く誤解が解けてゆっくり休めるといいな。

突然不思議な出来事に巻き込まれ、自分でも思っていた以上に精神的に疲労していたらしく目を閉じたらゆっくりと睡魔がやってくる。

こう、周りの物音が遮断されもう少しで眠りに落ちられそう…という所で睡魔は何かの物音で遠くに霞んで消えてしまった。

「こんな状況で眠れるなんて、感心するな。」

「ええまあ中断されましたけど。」

聞こえたのはこの建物の扉が開いた音で、やって来たのは昔話とかその辺りの物語に出てくるいかにも騎士様！という感じの優男。私の返答を聞くや否や、あからさまに不機嫌なご様子になったその彼の印象は、

『家名でのし上ったお飾り騎士様』

と、いう感じ。仰々しい格好をしているけど、そんなに強そうにも見えないし隙だらけ。正直ガツカリだ、とってもガツカリだ。見た目がいいだけに余計ガツカリだ。

「とりあえずそれはいい。これから私のする質問に貴様は正直に答える、いいな。」

「はいはい。」

「…あの盗賊の身柄を拘束したのは本当に貴様か？」

おつとストレート。もう少し勿体ぶってくるかと思っていたが直球でくるとは。根は単純なのかもしれない。

「それはもう村の方に説明しましたが。」

「黙れ、貴様は質問に答えればいい。」

いかにも私は偉い貴族様ですと言わんばかりの物言いに、一気に色々やる気が削がれた。正直もう色々放り出してここから逃げようかなあ。ああ面倒くさい。

そんな私の態度がまたもやお気に召さなかったようで、お貴族様は剣を抜いてこちらに突き付けて来た。

「貴様のような餓鬼があんな手錬を倒せる筈が無い！言えっ！貴様、何を企んでいるっ！？」

「……はあ。」

あの盗賊さんがそんなに強いと感じると言う事は、このお貴族様はやっぱりお飾り様ということで落ち着く。物凄く納得した。

「自分の言った事に嘘偽りはありません。」

ハッキリと言い切る私に怪訝そうな表情で様子を伺ってくるお飾り様。これだと私が何を言っても信用してはくれそうにない。

深いため息をついてまた睨まれる事にほとほと嫌気がさしていた頃に…不意に扉がまた開く。

「タイチヨー、裏取れましたよー討伐したのそのボウズで間違いなさそーですよ。」

「なんだと？」

入ってきた部下さんらしき男の人の言葉に、納得できないという様子でお貴族様は外に出て行った。

どうやら誤解も解けたようで、やっと軟禁から開放されるのかと思うと少し安心した。地面が堅くてそろそろお尻が痛い。

安堵から息を吐いていると、隊長さんが出て行った方を見ながらヤレヤレと肩をすくめる部下さんが目に入った。苦労させられているのだろう。

「悪かったなあボウズ、ちゃんと隊長に事情説明して誤解解いたらすぐ出してやつから。」

「それはどうも…ん？」

顔を上げて部下さんと目が合う…と、なにやらファンタジーな世界がそこに広がっていた。

妙な声を上げた私にどうしたんだ？と覗き込んでくる部下さん。額から顎が長く長いというかウマヅラというか…普通に馬だった。

「…馬？」

「ん？獣人見るのは初めてか？まあこの辺じゃあ、あんまり居ないか。」

ここで私は、本格的に異世界に来たんだなあと実感することになった……

#### プログラム4・とりあえず尋問。（後書き）

獣人さん登場。お話の舞台となる世界には、他にも様々な人間以外の異種族がいらっやいます。

その辺りも追々出てくるんじゃないかな、出てきます。



## プログラム5・とりあえず鍛錬。

「やぁおはよう、よく眠れたかい？」

「おはようございます。おかげさまでぐっすり眠れました。」

異世界渡来、森でお散歩、盗賊さんとエンカウト、プチ監禁から一夜明けた今日、私はこれでもか！というほどの眠りを経て村の宿屋で朝を迎えた。

あの後、部下さんが言った通りにお飾り様をなんとか宥めてくれたので嫌疑も晴れて、村長さんは手荒な事をしてしまったお詫びにと宿屋を無料で使っていていいと言ってくれた。

そのご好意に甘えて、すっかり朝食までいただいちゃまっている。結局晩御飯は食べ損なったので、その朝食は泣きそうなほど美味しかった。

「おやあんた、その髪はどうしたんだい？」

「えっ…あ、いや…変、ですかね…？」

しまった、確か黒い髪って珍しいものではなかっただろうか。それとも目の色とセットだと珍しいだけ？あぁ言い訳とか全く考えてなかった！

「いんやぁ、染めてるんだらう？最近の若い男の子たちの間で流行ってるんだってねえ。」

「……はい？」

気さくな宿屋のおばちゃんの話によると、最近この国の首都に勇者が光臨したらしい。それでその勇者は黒い髪に黒い目をしているらしく、その勇者のようになれるようにと血気盛んな若い男たちの一部で勇者を真似て髪を黒く染めるのが流行っているのだそう。

勇者、勇者ねえ…ということは魔王とか居たりするのだろうか。

光の勇者が魔王を討伐する！とかそんな。

……ん？黒髪黒目？それってまさか…

「おばちゃん、その勇者様が現れたのっていつ？」

「詳しい事は分からないけど…そうだねえ、そんな噂がこの村に届いたのが少なくとも1週間前くらいかねえ。」

一週間、ならあの子とは関係無さそう。私がこちらに来る時に一緒にいた…ええと、後輩くん。

その子がもし私のようにこの世界に来ていて、彼が勇者として『呼ばれた』のであれば、私はそれに巻き込まれたということになるのだけど、一週間前だと時期が合わない。

そもそも光臨する、という表現がよく分からない。勇者として認定された元々この世界の住人なのか、それとも私のように違う世界から呼ばれたのか。

物語のセオリー通りなら後者の可能性が高いのだが…気になる、物凄く気になる。もしその勇者様が違う世界の住人で、この世界に呼ばれたのであればもしかしたら私が元の世界に戻る手段も分かるかもしれない。

呼ぶ力があるなら、逆の力もあるよね？あるといいな。  
よし、次の目的地はこの国の首都だ！

手に馴染む木の感触。両手で握り、前に構える。振り上げて振り下ろす、また振り上げて振り下ろすその繰り返し。

部活の朝練習でのメニューの中で、屋外でも可能な練習を繰り返す。毎日の日課のようなものでやっておかないと、なんとなく落ち着かない。

「よーお、精が出るなあ。」

「ん？ああおはようございます。」

素振りを終えて、ひと休憩しようとしていたところで昨日の警備隊の部下さんがやってきた。うん、やっぱり何度見ても馬さんだ。

「そんな物珍しそうに見るなよ、落ち着かねえだろ。」

「すいません珍しくてつい。」

彼の名前はグニラード。家名は無いそうで、ただのグニラードらしい。

グニラ、と略してもいいと言われていたので私はそう呼んでいる。

例の隊長様の補佐をしているらしく、その話を聞いただけで苦勞しているんだなあとしみじみ。だってあのお貴族様の補佐って、どう考えても苦勞させられていると思う。

因みに私の中ではお貴族様よりもグニラさんの方が實力は上のように思える。彼は他愛も無い談笑をしている今ですら、常に周囲を警戒して隙も見せようとしない。

「そう言えばあの盗賊さんたちは？」

「ああ、これから首都に護送するよ。その前にちょっとした私的好奇心を満たそうかと思って。」

私的好奇心？と返すとああ、とだけ短く返され今度は私が頭から爪先まで観察される。確かにこれは落ち着かない。

やはり黒髪がまずかったのか、それともまだ怪しいところがあつたのか内心動揺を隠せないが、何とか平常心を保ちながらグニラさんの言葉を待つ。

「ボウズって・・・」

「自分が何か？」

「……男なのか女なのかどっちだ？」

あつ、そこ！？そこなの！？確かに本当は女でいま現在、男装中ではあるけれどまだ誰にもこの姿で嬢ちゃんとは言われてなかったのでしっかり変装できていると思っていたのだが…

ひとまず、なんで女かもしれないと思ったのか尋ねるとその情報源は意外というか、ああそこねという感想。

「いやなに、盗賊の奴らが尋問で『女』にやられたって頑として譲らねーからな？」

正直言つて大の大人が女に打ちのめされたと言い張っているのを想像したとしてもシニールだった。そこは伏せれば良かったのに、自分たちで恥の上塗りしちゃったんだね！。

「ああほら、相手も女の方が油断するかなつて。」

自分は中性的だとよく言われるから、油断を誘う為に女装して行ったのだと少し苦しい言い訳だと思ったが淀み無く答えてみせる。すると女装したのか、考えたな。と、納得してくれた。何だか少しばかり負けたような気がする、色々なものに対して！

「そっぴやボウズ、まだ名前聞いてなかったな。教えて貰つていいか？」

「ああ、いいですよ。」

さていいとは言つたものの、何と答えよう。男装しているのだから男らしい名前がいいだろうけれど私の名前は遊佐織恵。こちら風に言つとオリエユサとなるのだが…

「自分はユサ、です。家名は自分ありませんからただのユサで。」

「ユサか、分かつた。じゃあそろそろ行くわ、首都に来る事があつたらまた会おうぜ。」

そういえばこれから盗賊さんたちを首都に護送すると言つていたっけ…と、そんな事をゆつくり歩いてゆくグニラさんの背中に手を振りながら思い出した。

私の次の目的地も首都だし、また近いうちに会う事になるかも…  
ね。

「それじゃあ、色々お世話になりました!」

私がこの世界にやってきてから5日目。

盗賊を討伐したということで、彼らにかけられていた報奨金を村長さんから頂く事となり、首都に向かうと言えば旅の必需品や携帯食などの旅用品一式を揃えてくれた。

流石にそこまでタダでいただくわけにもいかなないので報奨金から差し引いて貰ったけれど、それでも残金は多い。

金額を見る限りあのお飾り隊長さんが言っていたように盗賊さんたちが手錬というのはあながち間違いではなかったのかもしれない。微妙にサイズの合ってなかった男装の為の服も一式仕立てていただいたりで、本当にこんなに至れり尽くせりされていいのだろうかと思った。

聞けばこの村は盗賊のアジトに近い場所にあった為、度々その被害に遭っていたらしい。たった5人の盗賊だったのに…と思ったその疑問の答えはまた追々知る事となるのだが今は割愛しておこう。

それを私が退けたので、今後生活が楽になると随分感謝されたものだ。必要経費は報奨金からキチンと引いてもらって、服が仕立て上がった次の日に、私は村を後にした。

当面の目的は首都に行き、元の世界に帰る手がかりを探すこと。  
あとついでに、噂の勇者様も見られたらいいなと思いながら私は旅  
路に就いた。

## プログラム5・とりあえず鍛錬。（後書き）

お馬さんは一足先に首都へ、数日遅れて織恵も旅立ちました。装備も一新し、色々と充実した旅路となりそうです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1643t/>

---

Operation “Hero”

2011年10月9日01時40分発行